ロールシャッハ・テストの父親・母親図版解釈仮説の 図版選択法による検討¹

福井 義一² 甲南大学 三宅 由晃 名古屋刑務所 岡崎 剛 東大阪若者サポートステーション
森津 誠 大阪国際大学 遠山 敏 東亜大学 山下 景子 徳島文理大学
岡田 信吾 寝屋川市教育委員会

**Validity of hypotheses about the father/mother interpretation of Rorschach cards:
Tested by using a card selecting method**

Yoshikazu Fukui (*Konan University*), **Yoshiaki Miyake** (*Nagoya Prison*), **Tsuyoshi Okazaki**
(*Higashiosaka Youth Support Station*), **Makoto Moritsu** (*Osaka International University*),
Bin Tohyama (*University of East Asia*), **Keiko Yamashita** (*Tokushima Bunri*
University), and **Shingo Okada** (*Neyagawa Municipal Board of Education*)

This study tests the validity of hypotheses about the interpretations of Rorschach father/ mother cards by having subjects select the cards. The results showed that regardless of the subject's gender, Card IV is far more often selected as the father card. However Card VII is not more often chosen as the mother card, if anything, the Color Cards are usually selected. The result of a correspondence analysis suggest that a certain combination of father and mother cards is more often selected. When the frequency of card selection is applied to the cluster of cards obtained in the study of Fukui et al (2008), the mother card is predominantly selected from the feminine/maternity-cards cluster. However, the father card was selected equally often from three clusters, indicating variation of the father figure. The results indicate the predominance of Card IV as the father card, and also confirm the lack of individuality with Card VII. Therefore, Card IV fulfills prerequisites for the father card hypothesis, while Card VII does not meet the criteria. The results do not support the validity of the hypothesis about the mother card interpretation.

Key words: Rorschach test, hypothesis about father/mother cards, interpretation, card selecting method.

The Japanese Journal of Psychology
2011, Vol. 82, No. 3, pp. 249-256

ロールシャッハ・テストにおけるいわゆる“父親図版”、“母親図版”解釈仮説とは、IV図版を父親に、VII図版を母親に関連づけて、父親や母親に対する態度、あるいはより一般的な権威像や女性像に対する態度が表現されると解釈するもので、Bochner & Halpern

(1945) が最初に言及して以来、実際に臨床的に適用されてきた長い歴史がある。Zelin & Sechrest (1963) は本解釈仮説の妥当性を検討するアプローチを、(a)父親・母親像を象徴的に表している図版を選択させる方法、(b) Semantic Differential 法 (Osgood, Suci, & Tannenbaum, 1957) 等を用いて図版を評定させて、父親・母親概念との類似性を検討する方法、(c) IV図版や VII図版に与えられた情報から、両親の情報や両親に対する態度を検出しようとする方法、すなわち基準関連妥当性を見る方法の三つに分類している。

福井・三宅・岡崎・森津・遠山・山下・岡田・安藤 (2008) は、前述した第二のアプローチである図版評定法によりその妥当性を検討した結果、IV図版が父親を象徴する図版であるという解釈仮説の妥当性については、限定的な証拠が得られたものの、VII図版が母親

Correspondence concerning this article should be sent to: Yoshikazu Fukui, Faculty of Letters, Department of Human Sciences, Konan University, Okamoto, Higashinada-ku, Kobe 658-8501, Japan (e-mail: yfukui@konan-u.ac.jp)

¹ 本研究の一部は、日本ロールシャッハ学会第12回大会において発表された。

² 本研究を行うにあたり、大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科卒業生の、平野 由佳氏、橋山 紗世氏、湯浅 俊治氏に、データ収集および集計のために多くの助力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します

を象徴する図版であると見なした解釈仮説の妥当性は疑わしいことを報告した。しかし、福井他（2008）は集団を対象に図版をプロジェクター呈示して実施したため、ロールシャッハ・テストを施行しておらず、実際のテスト場면을反映していないという問題があった。

そこで、本研究では実際にロールシャッハ・テストを施行し、限界検査段階で“父親・母親図版”を直接的に選択させる方法により、仮説の妥当性を検討することを目的とした。

図版選択法を用いた先行研究の結果はやや混交している。本解釈仮説に肯定的な知見として、Meer & Singer（1950）は 49 名の大学生男子を対象に父親・母親図版を選択させた結果、父親図版としてはⅣ、Ⅱ図版、母親図版としてはⅦ、Ⅹ図版が選ばれやすかったことを示した。Rosen（1951）も、大学生を対象とし、検査を実施せずに選択させ、父親象徴としてⅣ図版、母親象徴としてⅦ図版が選択されやすいことを見出した。

我が国では村上（1957）が、大学生男女 50 名と非行少年 50 名を対象に調査し、大学生では父親図版としてⅣ図版とⅠ図版が、母親図版としてⅦ、Ⅹ図版が有意に選択されやすいことを報告したが、ある図版が父親図版と母親図版のどちらに相応しいかを強制的に二者択一で選択させた比率を検定しており、数値自体を見ると母親図版として特定の図版が選ばれやすいとは結論できない。また、非行群では仮説を満たす結果は得られなかった。宇田川（1985）も、男子高校生 54 名を対象に同様の手続きで、父親図版はⅣ図版、母親図版はⅦ図版が有意に選ばれやすいことを報告しているが、同じく手法上の問題があると思われる。

さらに、Taniguchi, De Vos, & Murakami（1958）は、大学生の健常群 50 名と、性別をマッチングさせた非行少年群 50 名を対象に検査を施行後、父親と母親を連想させる図版を選択させた。その結果、大学生群は父親図版にⅣ図版を、母親図版にⅦ図版を有意に多く選択したことが分かった。加えて、母親図版として、全ての色彩図版も有意に多く選ばれたことを報告した。非行少年群については両親どちらの図版選択においても、仮説を満たす結果は得られなかった。

一方、高橋（1968）も大学生と非行少年群を対象に、ロールシャッハ図版の象徴的意義について、SD 法による図版評定と図版選択を併せて実施した。最も父親らしいカードと母親らしいカードを選択させた結果、大学生は父親図版としてⅣ図版とⅠ図版を、母親図版としてⅦ図版とⅡ図版を選択する者が、他図版を選択する者より有意に多かったことを報告した。また、非行少年群でも父親図版としてⅣ図版を、母親図版としてⅦ図版とⅧ図版を選択した者が有意に多くなり、本解釈仮説を裏づける結果となった。

前述した肯定的な結果に対して、本解釈仮説に否定的な結果を伴う先行研究も比較的多い。Charen（1957）と Tharkur & Tharkur（1971）は、父親・母親図版どちらに対しても特に選択されやすい図版がないことを報告した。Cole & Williams（1968）は、大学生 260 名という大規模なサンプルに対して調査を行い、父親図版については仮説通りⅣ図版が、母親図版としては仮説とは異なりⅧ図版とⅩ図版が選ばれやすいことを示した。また、Cole, Williams, & Moore（1969）は、大学生 128 名を適応群と不適応群に分け、両親を表す図版を選択させた結果、父親図版には両群ともⅣ図版を、母親図版には適応群は度数の多い順にⅧ、Ⅹ図版を、不適応群はⅩ、Ⅷ図版を選好する者が多かったことを見出した。ここでは、父親図版の選択は仮説通りであるが、母親図版としてⅦ図版は選ばれていない。しかし、上述の Tharkur & Tharkur（1971）や Cole & Williams（1968）、Cole et al.（1969）の研究では検査を実施せずに、図版選択を行わせているという手法上の問題が伴っている。

田中（1984）は、児童を対象とした研究も含め、Meer & Singer（1950）以降の 14 編の同様の研究を比較、検討し、否定的な結果の理由として、一般的な父親・母親像ではなく“私の”父親・母親像と一致する図版を選ばせる手続きにその一因を求めた。すなわち、実際の父親・母親像に限定した場合は、限定しない場合に比べて、仮説が支持されにくい傾向があることを示唆した（田中，1960，1984）。しかしながら、一般的な父性・母性や父親・母親像を象徴する図版を選択させたところで、受検者の実際の父親・母親との関係を類推する材料にはならないようにも思われる。こうした手続き上の統制がされていない点でも、先行研究から得られる結果が一貫して仮説を支持しているとは言い難い。

手続き上の問題点を無視して概観すると、父親図版としては、仮説通りⅣ図版が選ばれやすいが、母親図版は必ずしもⅦ図版が選ばれやすいわけではなく、Ⅶ図版が母親図版であるという立場に立った解釈が適切であるかは疑わしいと思われる。また、ほとんどの研究は比較的古い時代に集中しており、最近になって図版選択を用いた研究は見当たらないため、現時点におけるデータを呈示することは有用であると思われる。

近年、こうした研究は児童を対象とする傾向があり、青年期以上を対象とした研究はあまり行われていない。田中（1984）は、本解釈仮説が親子関係障害の発見を示唆していれば、成人よりも子どもを対象とする方が適切であるからかもしれないと述べている。しかし、Bowlby（1969 黒田・大羽・岡田・黒田訳 1976，1973 黒田・岡田・吉田訳 1977，1980 黒田・吉田・横浜訳 1981）の愛着理論や養育態度についての歴大な研究が示すように、親子関係の障害が与える

影響は様々な発達段階に及ぶことが想定され、青年期や成人期を対象に本解釈仮説の妥当性を検討することは、発達の連続性から考えても有用であると思われる。

そこで本研究では、福井他（2008）の図版評定法の結果が、図版選択法によっても再現されるかどうかを検討することを目的とした。検査場面と条件を近づけるために、実際にロールシャッハ・テストを行い、限界検査段階で“父親図版”と“母親図版”を選択させて、図版の選択傾向に一定の偏りがあるかを検討する。両親を表す図版が、Ⅳ図版やⅦ図版といった特定の図版に偏って選択されるのであれば、ある図版が両親のどちらか一方を象徴しているという仮説に対するいくばくかの証拠となるであろう。しかし、こうした偏りが認められないのであれば、解釈仮説の有効性には大きな瑕疵があることになり、本解釈仮説の見直しを迫られるだろう。

田中（1984）が指摘するように、仮説通りの結果が得られたとして、必ずしも解釈仮説の妥当性を支持しないことは言うまでもないが、Ⅳ図版とⅦ図版が他図版と比較して父親・母親図版として選ばれやすことが示されれば、図版評定法による結果（福井他，2008）と同様に、最低限の必要条件を満たしたことになるだろう。

さらに、本研究により、特定の図版が両親像と関係づけられるという証拠が見出されれば、臨床解釈上も非常に有用であろうし、その証拠が得られなければ、両親との関係や愛着関係、対象関係を査定するための新たな方法論の構築が必要となるだろう。

ところで、本解釈仮説の検討に際して、父親・母親図版選択の組み合わせについて言及した先行研究は極めて少ない。本研究では、両図版選択の組み合わせについても探索的に検討する。また、図版選択法の結果との組み合わせ研究も少ないため、福井他（2008）で図版評定法から得られた男性・父性図版（Ⅳ図）、中性図版（Ⅰ，Ⅵ，Ⅸ図版）、女性・母性図版（Ⅱ，Ⅲ，Ⅴ，Ⅶ，Ⅷ，Ⅹ図版）の各カテゴリと、父親・母親図版選択の組み合わせについても探索的に検討した。

方 法

調査協力者

大学生 233 名（男性 133 名、女性 100 名）を対象とした。平均年齢は、19.8 歳（ $SD=1.44$ 歳）であった。なお、過去の受検歴は問うていない。参加した学生は第一著者の心理学関連の講義のコース・クレジット対象となっていた。同時に他の研究で使用した質問票調査も実施された。また、実施の際に、臨床心理士の有資格者と連絡が取れるようにして、万一気分が悪くなるなどの報告があった場合に、対処できるようにし

た。

検 査

検査の目的と任意性、データの公表および保管方法について、書面によるインフォームド・コンセントを得た上で、ロールシャッハ研究会に所属する 3 名の学部学生と第一、第二、第三、第七著者によりロールシャッハ・テストが施行された。検査者は全員 Klopfer 法（Klopfer, Ainsworth, Klopfer, & Holt, 1954 京都ロールシャッハ研究会訳 1957）の訓練を少なくとも 1 年以上にわたって受けており、検査は第一著者の指導のもとに実施された。検査者の性別は男性 5 名、女性 2 名であった。検査者との位置関係は机を挟んで 90 度とした。通常の検査終了後、限界検査段階で、“Self Card”、“父親図版”、“母親図版”、“他の家族成員を表す図版”、“Like Card”、“Dislike Card”を選択してもらい、その理由を聴取した。その際、一般的な父親像や母親像ではなく、自分の両親像について回答するように教示した。具体的には、10 枚の図版を目の前に並べ、“この絵の中であなたの父親だと思われる図版はどれですか？”と聞き、選択されたら、“その絵が父親だと思われたのはどうしてですか？”と教示した。

結 果

父親図版として選択された図版の度数分布表を Table 1 に、母親図版については Table 2 に示した。複数の図版を選択した者は、最初に選択した図版をカウントした。また、“存在しない”、“いない”等と答えたものは、“無”に分類した。最も度数が大きかった図版には太字で下線が引いてあり、上位三位までの図版も太字で表示した。Table 1 より、性別にかかわらず、父親図版としてⅣ図版を選ぶ者が顕著に多く、全体の 40% 程度を占めたことが分かった。続いて、Ⅵ図版を選ぶものが 10% 程度で、続いてⅠ図版、Ⅹ図版が多く、選択しなかった者も同程度存在した。ⅢとⅤ、Ⅶ図版は顕著に低い選択率を示した。

性別による父親図版の選好に有意な偏りがあるかを確認するために、選択しなかった者を除いて 2（性別） $\times$ 10（図版）の χ^2 検定を行った結果、性別による有意な偏りは見られなかった（ $\chi^2(9)=7.56, ns$ ）。そこで、合計人数による χ^2 検定を行った結果、図版選好に有意な偏りが見られた（ $\chi^2(9)=292.12, p<.01$ ）。ライオンの名義水準による多重比較を行った結果、5% の有意水準でⅣ図版は他の全ての図版よりも父親図版として有意に選択されやすいことが分かった。

母親図版の選択結果は父親図版とは異なり、複数の図版に分散した。Ⅲ，Ⅷ，Ⅸ図版がそれぞれ全体の 15% 程度を占め、Ⅹ図版とⅦ図版が続いた。父親の場合とは異なり選択しなかった者は少なく、女性では皆

Table 1
父親図版として選択された図版の度数

		無	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
性別	男性	9	6	7	5	<u>60</u>	3	13	6	7	5	10	131
		6.9%	4.6%	5.3%	3.8%	45.8%	2.3%	9.9%	4.6%	5.3%	3.8%	7.6%	100%
	女性	6	9	6	3	<u>35</u>	6	10	1	7	9	5	97
		6.2%	9.3%	6.2%	3.1%	36.1%	6.2%	10.3%	1.0%	7.2%	9.3%	5.2%	100%
計		15	15	13	8	<u>95</u>	9	23	7	14	14	15	228
		6.6%	6.6%	5.7%	3.5%	41.7%	3.9%	10.1%	3.1%	6.1%	6.1%	6.6%	100%

注) 上段は度数, 下段はパーセンテージを示す。

Table 2
母親図版として選択された図版の度数

		無	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
性別	男性	8	8	8	<u>20</u>	4	9	2	12	26	21	14	132
		6.1%	6.1%	6.1%	15.2%	3.0%	6.8%	1.5%	9.1%	19.7%	15.9%	10.6%	100%
	女性	0	5	9	<u>18</u>	3	10	2	13	9	14	14	97
		0.0%	5.2%	9.3%	18.6%	3.1%	10.3%	2.1%	13.4%	9.3%	14.4%	14.4%	100%
計		8	13	17	<u>38</u>	7	19	4	25	35	35	28	229
		3.5%	5.7%	7.4%	16.6%	3.1%	8.3%	1.7%	10.9%	15.3%	15.3%	12.2%	100%

注) 上段は度数, 下段はパーセンテージを示す。

無であった。Ⅷ図版は、男性は 20% 弱の選択率であり、最も度数が高かったが、女性では 10% 未満であった。“母親図版”とされてきたⅦ図版の選択率は 10% 程度であり、目立って高い度数とは言えず、相対的に色彩図版が選択される率が高かった。また、“父親図版”として選択率の高かったⅣ図版とⅥ図版を選ぶ者は非常に少なかった。

父親図版同様、性別による母親図版の選好の度数に有意差があるかを確認するために選択しなかった者を除いて 2 (性別) × 10 (図版) の χ^2 検定を行った結果、性別による有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(9) = 11.26, ns$)。合計人数による χ^2 検定を行った結果、図版選好に有意な偏りが見られた ($\chi^2(9) = 58.96, p < .01$)。ライアンの名義水準による多重比較を行った結果、Ⅲ図版はⅠ、Ⅳ、Ⅵ図版より 5% の有意水準で有意に母親図版として選択されやすいことが分かった。また、Ⅳ図版はⅢ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ図版よりも、Ⅵ図版はⅢ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ図版よりも 5% の有意水準で有意に選択度数が小さいことが分かった。

次に、父親図版と母親図版の選択で組み合わせの度数分布表を Table 3 に示した。期待度数が 5 未満のセルが多いため参考にはしかならないが、 χ^2 検定の結果は有意であった ($\chi^2(100) = 211.604, p < .001$) が、この結果は組み合わせによる偏りというよりは、父親図版として選択されたⅣ図版の影響が強いものと思われ

る。父親図版にⅣ図版、母親図版にⅢ図版を選択した者が最も多く、全体の約 10% を占めた。また、父親図版にⅣ図版、母親図版にⅤ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ図版を選んだ者も 10 名以上存在した。他にも、父親図版にⅥ図版を選んだ者が、母親図版にⅧ、Ⅸ図版を選ぶ者がやや多かった。それ以外に、特に度数の多い図版の組み合わせはなかった。

次に、父親・母親図版を選択しなかった者を除いて、行に父親図版選択の 10 カテゴリ、列に母親図版選択の 10 カテゴリを用いてコレスポンデンス分析を行った結果のプロットを Figure 1 に示した。イナーシャの寄与率は 2 次元の累積で 60.7% であった。Figure 1 から、父親図版にⅣ図版を選ぶことは、母親図版にⅢ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ図版を選ぶことと近い位置にあることが分かる。選択されやすい組み合わせは第 1 象限の原点近くにあり、そこから離れるような組み合わせは少ないことを示している。父親図版にⅣ図版を選ぶことと、母親図版にⅣ、Ⅵ図版を選ぶことは非常に遠い位置にあり、これは父親図版にⅣ図版を選択した上で、Ⅳ、Ⅵ両図版を母親図版に選択する者はいないという結果とも符合していることが分かる。また、母親図版にⅢ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ図版を選ぶことと、父親図版にⅦ、Ⅲ、Ⅷ図版を選ぶことも非常に遠い関係にあるといえる。これも、その組み合わせで両親を表す図版を選ぶ者が全くいないか、いても極めて稀であ

Table 3
父親図版と母親図版の選択度数のクロス集計表

		母親図版											
		無	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
父親図版	無	6	0	0	3	0	0	0	1	2	3	0	15
	I	0	0	2	3	1	1	1	0	0	4	3	15
	II	0	2	0	3	0	4	0	1	3	0	0	13
	III	0	2	1	0	0	0	2	1	0	1	1	8
	IV	2	6	5	22	0	10	0	12	15	10	11	93
	V	0	2	1	0	0	0	0	0	2	2	2	9
	VI	0	1	2	2	0	1	1	2	6	7	1	23
	VII	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	3	6
	VIII	0	0	1	0	2	2	0	1	0	4	4	14
	IX	0	0	1	2	1	0	0	3	5	0	1	13
	X	0	0	3	1	1	1	0	4	2	3	0	15
計	8	13	17	36	6	19	4	25	35	35	26	224	

ることと符合している。

本研究で得られた図版選択のデータを、福井他(2008)の図版評定法による研究で得られた3つのクラスターに集約してTable 4に示した。男性・父性図版はIV図版、中性図版群はI, VI, IX図版、女性・母性図版群はII, III, V, VII, VIII, X図版から構成されている。期待度数が5以下のセルが若干多いため、これも参考にとどまるが、 χ^2 検定を行った結果、父親・母親図版選択のクラスターの組み合わせによる度数に有意な偏りが見られた($\chi^2(4)=9.629, p<.05$)。調整済み残差から、父親・母親ともIV図版を選択した者は0名で、有意に少なく、父親図版としてIV図版、母親図版を女性・母性図版群から選んだ者が有意に多かつ

たことが分かった。父親図版をIV図版から選ぶ者は多いが、中性図版群や女性・母性図版群から選択する者も比較的多く存在したのに対し、母親図版はほとんどの者が女性・母性図版群から選択することが分かった。IV図版は、父親図版としては選ばれやすいが、母親図版としてはかなり忌避される傾向にあることが分かった。

考 察

本研究は、実際にロールシャッハ・テストを施行し、限界検査段階で両親を表す図版を選択させるという手法を用いて、父親・母親図版解釈仮説を検討した。その結果、IV図版が父親図版であるという仮説に

Figure 1. コレスポネンス分析による父親・母親図版選択のプロット

Table 4
クラスター毎の父親・母親図版選択度数

		母親図版			計
		男性・父性 図版	中性図版群	女性・母性 図版群	
父親 図版	男性・父性図版 (IV)	0	16	75	91
	中性図版群 (I, VI, IX)	2	14	35	51
	女性・母性図版群 (II, III, V, VII, VIII, X)	4	19	42	65
	計	6	49	152	207

ついては、若干の根拠が与えられたと思われるが、Ⅶ図版が母親図版であるという仮説は妥当ではないと思われる結果が得られた。

図版選択の度数

図版選択度数から、父親図版としてはⅣ図版の選択率が圧倒的に高いことが分かる。Ⅳ図版以外には、他図版よりも有意に多く選択される図版がないことから、Ⅳ図版が父親図版として選ばれやすいことは明らかであり、父親図版としての特異性を有していると思われる。

母親図版仮説については妥当性を示すような結果は得られなかった。Ⅶ図版は 5 番目の選択率にとどまり、Ⅲ, Ⅷ, Ⅸ, X 図版という色彩図版が上位を占めた。これは全ての色彩図版が母親図版として選択されたという Taniguchi et al. (1958) の結果に近い。本研究では最も選ばれる頻度が高いⅢ図版でさえ、20%に満たなかった。このことから、Ⅶ図版が母親図版であるという仮定を基に解釈を展開することに妥当性があるとは考えられないと思われる。

本研究の結果は、先行研究を概観した結果 (田中, 1984) とほぼ一致しており、父親図版解釈仮説には支持的であるが、母親図版解釈仮説の妥当性を認めなかった。しかし、初期にはⅦ図版を母親図版として選択することを示した研究が比較的多い。こうした変化の一因として、社会の変化に伴う母親像の多様化や、母親とは父親との関係に比べて感情交流が活発であることの反映が挙げられるが、本研究の結果から扱える範囲を超えている。宇田川 (1985) も、青年期の母親の捉え方は、父親と比べ多種多様性を示していることを報告しており、本研究の結果もこうした傾向を是認するものであるといえるかもしれない。

図版選択の組み合わせと相関係数分析

Table 3 や Figure 1 に示したように、父親と母親の選択の組み合わせからは、父親図版としてⅣ図版、母親図版として色彩図版にⅦ図版を加えた図版群から選択する組み合わせが多いことが分かった。それ以外に多い組み合わせはほとんどなく、特定の決まった図版

の組み合わせを選択する者が多いことから、ある程度固定した両親に対するイメージが存在していることが示唆されると思われる。

また、福井他 (2008) の図版評定法による研究において得られたクラスターを用いて組み合わせを見ると、母親図版は女性・母性図版群 (Ⅱ, Ⅲ, V, Ⅶ, Ⅷ, X) から選ばれる率が圧倒的に高いことが分かったが、父親図版は 3 つのクラスターに散らばって選択されており、中性図版群 (Ⅰ, Ⅵ, Ⅸ) や女性・母性図版群からも選択する者が多いことが分かった。福井他 (2008) は、一般的な男性・女性性、父性・母性の程度といった変数を用いて図版を分類しているため、一般的に持っている父性や母性のイメージと、実際の両親に抱くイメージを比較した際、父性と父親のずれの方が、母性と母親のずれよりも大きいかもしれない。現在では、近代型家族の出現によって家庭における父性の崩壊や、父性の変質が叫ばれるようになって久しい (柏木, 1993; 妙木, 1997; 芹沢, 2005)。父親図版としてはⅣ図版が選択されやすいものの、全体の 40% にすぎず、他図版からも多く選択されているという事実は、こうした父親像の変化や変質を反映しているのかもしれない。むしろ父親像の母親化や変質が生じているのであって、母親像については女性性や母感性を感じさせる図版群から選択される率が高いことから、Ⅶ図版だけが母親像を象徴するという仮説は支持されなかったものの、母親像についてのステレオタイプは共有されていることを示しているのかもしれない。こうした点について、本研究の結果から何らかの結論を導き出すことはできず、今後のさらなる研究が期待される。

図版評定法の結果との統合

福井他 (2008) は、図版評定法により、Ⅳ図版が最も男性的、父性的であると評価され、さらに多変量解析の結果から他図版に比較して特異的な性格を持つことが分かったのに対して、Ⅶ図版は他図版に比較して女性的・母性的であるとは評価されず、むしろいくつかの色彩図版の後塵を拝す結果となったことを報告した。本研究の結果も、その結果を追認するものである

といえる。本解釈仮説を検討する代表的な二つの方法で、同様の結果が得られたことから、Ⅳ図版を父親図版とみなした解釈仮説には、最低限の必要条件を満たしたという意味で、ある程度の妥当性を与えることができたといえるが、母親図版解釈仮説についてはその要件を満たさなかったと結論できる。そのため、本解釈仮説の適用はⅣ図版が父親図版であるとする解釈仮説については慎重に適用すること、およびⅦ図版が母親図版であるとする解釈仮説については速やかに棄却し、母親図版群とでもいべき指標を提唱したい。

課題

本研究の結果から、父親・母親図版解釈仮説について何らかのエビデンスを示し得たとはいえないため、今後は両親像との関係や愛着関係、対象関係を査定するためにロールシャッハ・テストをどのように用いるべきか、さらなる研究の蓄積が必要であろう。例えば、ある図版を選択した者が、どのように両親像を知覚しているかを外的基準により測定し、両者の関係を検討したり、ある図版を両親像として選択した理由を質的データとして精緻に分析していったりする手法が、用いられるべきであろう。

また、本研究では、“私の”両親像を表す図版を選択させたため、一般的な両親像として教示した場合は結果が異なる可能性がある。しかしながら、前述したように、ある特定の図版に対する反応を元に、両親との関係を類推するのであれば、一般的な両親像と一致する図版を選択させる手続きは、基礎データとしては興味深い、仮説の妥当性を検証する手法としては相応しくないと考えられる。

本研究で父親図版としてⅣ図版が選択されやすかったとはいえ、それはⅣ図版が父親像を象徴していることの直接的な証明にはならないし、Ⅳ図版に与えられた反応から父親との関係を解釈しても構わないということにもならない。Ⅳ図版が父親図版としては突出して選ばれやすいという事実を確認しただけであって、田中（1960）が指摘するように象徴性を証明することは非常に困難な課題である。今後は、こうした課題を念頭に置きながら、Zelin & Sechrest（1963）の分類による第三のアプローチも用いて、父親・母親図版解釈仮説の基準関連妥当性を検討していく必要があるだろう。

また、本研究は健常な大学生のみを対象としており、一般成人や臨床群のデータを蓄積することにより、根拠に裏づけられた解釈仮説を展開することが期待される。

引用文献

- Bochner, R., & Halpern, F. (1945). *The clinical application of the Rorschach test*. 2nd ed. New York: Grune & Stratton.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. New York: Basic Books.
(ボウルビイ, J. 黒田 実郎・大羽 泰・岡田 洋子・黒田 聖一 (訳) (1976). 母子関係の理論 1——愛着行動—— 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss*. Vol. 2. *Separation*. New York: Basic Books.
(ボウルビイ, J. 黒田 実郎・岡田 洋子・吉田 恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論 2——分離不安—— 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss*. Vol. 3. *Loss*. New York: Basic Books.
(ボウルビイ, J. 黒田 実郎・吉田 恒子・横浜 恵三子 (訳) (1981). 母子関係の理論 3——愛情喪失—— 岩崎学術出版社)
- Charen, S. (1957). Pitfalls in interpretation of parental symbolism in Rorschach cards IV and VII. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 52-56.
- Cole, S., & Williams, R. L. (1968). Age as a determinant of parental interpretation of Rorschach cards IV and VII. *Perceptual and Motor Skills*, **26**, 55-58.
- Cole, S., Williams, R. L., & Moore, C. H. (1969). Parental interpretation of Rorschach cards IV and VII among adjusted and maladjusted subjects. *Journal of General Psychology*, **81**, 131-135.
- 福井 義一・三宅 由晃・岡崎 剛・森津 誠・遠山 敏・山下 景子・岡田 信吾・安藤 治 (2008). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親図版解釈仮説の妥当性に関する研究——図版評定法を用いて—— 心理臨床学研究, **26**, 549-558.
(Fukui, Y., Miyake, Y., Okazaki, T., Moritsu, M., Tohyama, B., Yamashita, K., Okada, S., & Ando, O. (2008). Validity of a hypothesis on Rorschach's father/mother cards' interpretation: By using the card rating methods. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **26**, 549-558.)
- 柏木 恵子 (編著) (1993). 父親の発達心理学——父性の現在とその周辺—— 川島書店
(Kashiwagi, K.)
- Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G., & Holt, R. R. (1954). *Development in the Rorschach technique*. 1. *Technique and theory*. New York: World Book.
(クロッパ, B. 他 京都ロールシャッハ研究会 (訳) (1957). ロールシャッハ法の発達 1 京都ロールシャッハ研究会)
- Meer, B., & Singer, J. L. (1950). A note on the "father" and "mother" cards in the Rorschach inkblots. *Journal of Consulting Psychology*, **14**, 483-484.
- 村上 英治 (1957). ロールシャッハ・テストにおける人間関係に関する研究(1)——“父親カード”と“母親カード”の分析—— 名古屋大学教養学部紀要, **2**, 1-10.
(Murakami, E.)
- 妙木 浩之 (1997). 父親崩壊 新書館
(Myoki, H.)

- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. (1957). *The measurement of meaning*. Urbana, Ill: University of Illinois Press.
- Rosen, E. (1951). Symbolic meanings in the Rorschach cards: A statistical study. *Journal of Clinical Psychology*, 7, 239-244.
- 芹沢 俊介 (2005). ついていく父親——胎動する新しい家族—— 春秋社
(Serizawa, S.)
- 高橋 茂雄 (1968). ロールシャッハ・インクプロットの象徴的意義についての研究 心理学モノグラフ, No. 6, 75-89.
(Takahashi, S.)
- 田中 富士夫 (1960). ロールシャッハ・カードの象徴的意義——“父親カード”と“母親カード”の問題をめぐって—— ロールシャッハ研究, 3, 171-185.
(Tanaka, F. (1960). Parental symbolism in the Rorschach cards. *Rorschachiana Japonica*, 3, 171-185.)
- 田中 富士夫 (1984). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親カード仮説の諸問題 金沢大学文学部論集 行動科学科篇, 4, 1-11.
(Tanaka, F. (1984). On the problems of the hypotheses derived from the “father and mother” cards in the Rorschach. *Studies and Essays: Behavioral Sciences and Philosophy*, 4, 1-11.)
- Taniguchi, M., De Vos, G., & Murakami, E. (1958). Identification of mother and father cards on the Rorschach by Japanese normal and delinquent adolescents. *Journal of Projective Techniques*, 22, 453-460.
- Tharkur, G. P., & Tharkur, M. (1971). Symbolic meanings of Rorschach cards II, IV and VII. *Perceptual and Motor Skills*, 32, 190.
- 宇田川 一夫 (1985). 男子高校生における両親像・自己像の研究——ロールシャッハ・テストによる縦断的研究—— 東北福祉大学紀要, 10, 219-230.
(Udagawa, K.)
- Zelin, M., & Sechrest, L. (1963). The validity of the “Mother” and “Father” cards of the Rorschach. *Journal of Projective Technique*, 27, 114-121.
- 2009. 10. 13 受稿, 2011. 1. 22 受理 ——